

タイトル：2020 年度研究セミナー（第 21 回）

日時：2020 年 12 月 19 日（土）～20 日（日）

オンライン開催

「17 世紀地中海島嶼地域におけるオスマン朝交易政策の変容——クレタ征服期のカーヌーンナーメから」

末森 晴賀（北海道大学大学院文学研究科博士課程）

本セミナーの存在は博士課程に入学したばかりの頃から知っていたが、東京からは遠い北海道の地にいてなかなか出不精であったことや、若干の人見知りのため、参加は見送ったままトルコ留学へと旅立ってしまった。三年間の留学を終えていざ帰国してみると、コロナ禍のため帰国前に予想していたものとは違う未来がそこにはあり、大学への出入りさえも難しい状況になっていた。気づかないうちにどこか鬱々と時を過ごす中で、指導教官の先生から本セミナーを紹介されたことをきっかけに、応募することを決めたのである。ちょうどその頃、留学中に会ったクレタのカーヌーンナーメと格闘中であり、中東イスラーム関連の専門家である先生方にぜひともお話を伺いたいと思っていた。また、留学中お世話になった先生にもう一度お会いしたいという気持ちもあった。

そうして参加したセミナーは、思っていたのよりもずっと気楽な雰囲気であった。今回はオンライン開催であったため残念ながら直接お会いすることは叶わなかったが、パソコンの四角い画面を通して全体の空気を感じることができたとし、参加者の方一人ひとりとながることができた。長時間画面を見続けることで首に少し痛みを感じはしたものの、挙手をして指名されたら発言するという Zoom 会議のスタイルは、席の近さ遠さによる心理的な影響を受けにくいという意味で、平等に発言権が与えられているというメリットも見いだせるかもしれない。

対面ならではのリアルさは失われるものの、オンラインだからといってセミナーの中身が損なわれるようなことは少しもない。報告と質疑応答で一人当たり計二時間の持ち時間を与えられる機会はめったにないことである。拙さの漂う長丁場な報告にもじっくり耳を傾け、わたし自身も気づかなかった意図を汲み取った上で、史料の扱い方や時代背景の踏まえ方、大きな話への位置づけ方など、足りない部分を的確に指摘していただいた。専門分野のそれぞれ異なる先生方からのコメントはその数だけ糧となり、伺うたびに頭の中で何か煌めいてイメージが開いていくのが分かった。他の発表者の方々から質問や助言を得られたことも有り難かった。それぞれに特徴のある他の発表者の報告を聞くことができたのも幸運で、知見が増えることのおもしろさと同時に、同じ立場の者として学ぶものがあった。また、博士論文執筆者の方のお話は、周りに同世代の学生や先輩のいないわたしにとって心強いものであった。いろいろな方からいただいたお話をしっかり咀嚼して、よりよいものにしていきたい。

何よりも、優しさも厳しさも含めて、よい方向へ導こうとする先生方の気持ちが感じられたのがうれしかった。画面の向こう側からさえも伝わるこの感覚ゆえに、一層楽しかったと感ずることができたのだと思う。同時に、オンライン全盛の状況にもかかわらず、北の大地に基本的に籠っていたのが、もっといろいろな研究会に出て学びたいと素直に思えるようにもなった。そのように背中を押してくれたのも、本セミナーである。あらためてセミナーでお世話になった先生方、事務局の方々、他の発表者の方々にお礼申し上げたい。どうもありがとうございました。